

子どもの遅刻・不登校

孤立させない見守り。

孤独を感じ、気持ちを隠して登校している子どもがいます。人間関係、家庭の問題等。学校に通えることは、必ずしも「当たり前」ではありません。

不登校の兆候を見逃さない 心の動きを感じる見守り

文部科学省が定める「不登校」の定義は「年間30日以上欠席した児童生徒のうち、何らかの理由で登校しない、しなくともできない状況にある者」とされており、調査によると平成30年度でその数は約16万5千人にのぼります。しかし保健室登校や欠席日数が29日以下の子どもは含ま

れておらず、実際はこの倍以上であると言われていました。先生や友人との人間関係に不安がある、勉強についていけず、学習が苦痛であるなど、登校できない理由さまざまです。福智町スクールソーシャルワーカーの渡邊聡子さんは「不登校に至るまでの経過は様々ですが、遅刻がちになり、休みが目立つようになるなど事前の兆候があります。また登校している子どもの中には親が毎朝説得し、なんとか送り出している家庭もある。子どもの対応に親も困っていることがあります。まわりに心配をかけたくない一心で、一人で抱え込む子も

いる。子どもが出すSOSのサインに気付いてあげて欲しい」と家族や周囲の見守りの大切さを強調します。

子どもの思いを守り 支援につなげる気付き

不登校は大きな問題であり、その先には様々な状況の中で困っている子どもや親がいます。渡邊さんは「もし知っている子が一人で登下校していたり、暗い顔でいるのを見かけたら、声をかけてみてください。それができなくても、

役場や学校・区長など伝える場所はどこでも大丈夫。その声が届けば、それが支援につながります」と違和感を感じたときは身近な機関への連絡を呼びかけました。不登校に潜む困ったことを抱えたまま子どもたちが成長していくと、将来的にもっとこつすればよかった、と後悔することも少なくありません。「学ぶ機会は大人が守るべき。将来の選択肢はいくつもあることを知っていて欲しいです」。孤立を防ぐ「支援」は決して難しいことではありません。何げない声かけ、少しの気が子どもたちの未来を守ることにつながっていきます。

SSW 渡邊先生が大切にしていること 支援は特別なことじゃない



福智町SSW(赤池地区担当) 渡邊 聡子さん

1 自己有用感を高める

自己肯定感(自信)をつける以前に、自己有用感(必要とされる感覚)を持たせることが大切です。「あなたがいるから本当に助かる。これからもよろしくね」など、必要な存在であることを認め、伝えることが重要です。

2 大人を頼る意識を作る

子どもの本音は、会話や遊びの中でこぼれることもあります。話を聞いてあげることが子どもにとって大きな安心です。この受け入れてもらった感覚と経験を積み重ねることで、人に頼る意識が芽生えていきます。

3 小さなサインを見逃さない

周りから見た「困った子」は、多くの場合は問題を抱えた「困っている子」。さびしさや環境になじめない立ちが、行動に出てしまうことがあります。子どもの心のサインを見逃さず、早期発見・早期解決が重要です。

SSW (スクールソーシャルワーカー)

学校や日常生活における問題に直面する子どもを支援する福祉専門職。主に教育委員会から非常勤で配置され、社会福祉士か精神保健福祉士の資格を持つ人や、教員OBなどが役割を担います。家庭での虐待や貧困などが絡むケースも多い不登校やいじめなどの問題を、当事者の子どもだけでなく、家族や友人・学校・地域など周囲に働きかけて解決を図ります。福智町でも各中学校区(赤池・金田・方城)に1名ずつ派遣されており、随時子どもや保護者の相談を受け付けています。訪問日や時間などの詳細は、各学校にお問い合わせください。



↑市場小学校で渡邊先生が勤務する相談室。相談のためだけでなく、気軽に雑談や遊びができる空間として開かれて、いつも多くの児童が訪れています。

●人権のまちづくり講座

2/18(火) 19:00~

会場 公民館金田分館 1階 (福智町金田1153番地1/金田駅前)

講師 福智町スクールソーシャルワーカー 渡邊 聡子さん

不登校当事者(現・大学生)の体験談もあり

子どもたちの思いに気付いていますか

遅刻・不登校の支援を通じて

「不登校」とは「何らかの心理的・情緒的・身体的あるいは社会的要因・背景により登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いたもの」と定義されています。文部科学省が公表した平成30年度の不登校児童生徒数は164,528人です。福智町においても不登校児童生徒が多くその要因はさまざまです。人権、福智町においても不登校児童生徒が多くその要因はさまざまです。渡邊聡子さんの講演をとおして、福智町の困っている子どもたちの思いに気付かせ、それぞれの立場で何ができるのかを一緒に考える時間とさせていただきます。

福智町のほのぼの館 ☎0947-22-6290

不登校当事者・現大学生Iさんの実体験

テレビや漫画が教科書の幼少期。18歳で小学生に

自分はなぜ学校に行けないんだろう、と感じたのは7歳の時。両親は生活が苦しく、私を学校に行かせていませんでした。テレビや漫画で見る学校生活。自分だけ周りと違うことをいつも感じていました。アルバイトの面接でも、履歴書に書ける内容が何もありません。

しかし18歳で人に勧められ、小学校に編入。それから多くの困難に直面しましたがその度に誰かが救いの手を向けてくれました。親がすべてだと思っていた自分が、助けてくれる人がいることを知った。当たり前ができない人々を助ける、その方法は必ずあると思います。

人権のまちづくり講座開催

SSWの渡邊先生が、遅刻・不登校支援の経験から気付いた子どもの思いや周囲にできることを講演。大学生Iさんの体験談も交えながら、本当に必要な支援を参加者とともに考えます。

保健課 隣保館係 ほのぼの館 ☎ 22-6290

